

二〇二二年七月十日 開催

〔グローバル・コミュニケーション研究所発足記念講演〕

## ミャンマー民主化のゆくえ——アウンサンスーチーとノーベル平和賞

永井 浩

■講演者……永井浩（本学名誉教授）

■コメンテーター……エイチャン（本学アジア言語学  
科教授）

■司 会……矢頭典枝

### アウンサンスーチーとの出会い

まず、アウンサンスーチーさんと私、それに本日のコメンテーターであるエイチャン先生との関係について簡単にふれさせていただきます。

スーチーさんとの私の最初の出会いは、一九九五年九月にさかのぼります。彼女が軍事政権による最初の自宅軟禁を解かれ、六年ぶりに自由の身になった直後です。ビルマの民主化運動の指導者として世界的に知られ、ノーベル平和賞受賞者でもある彼女が自国の今後をどのように考えているのかを

知ろうと、世界中から多数のジャーナリストが首都（当時）のヤンゴンを訪れました。当時、毎日新聞の記者をしていた私もそのひとりでした。

ビルマ出発のまえに、私は日ごろ東南アジアについていろいろとご教示を仰いでいた石井米雄先生にお会いし、スーチーさんに何か伝言はないかとたずねました。先生は日本の東南アジア研究のパイオニアであるとともに、この地域の歴史と上座仏教の世界的権威であり、スーチーさんが一九八五年に京都大学の研究員として来日していたとき、京大の東南アジア研究センター教授として彼女の面倒をみたことがあります。先生は、「とくにないが、エイチャンのことを心配しているの、彼のことだけ訊いてみてくれ」と言われました。エイチャンは京大の教え子のひとりであるビルマ人留学生で、博士号を取得して帰国したのち大学で教えているときに民主化運動にかかわり投獄された。家族がとても苦労していると

聞いているので、スーチャーにたずねてほしい、とのことでした。エイチャンという名を、私はそのとき初めて耳にしました。私がスーチャーさんに石井先生の心配を伝えると、彼女は「わたしたちが支援しているからご安心ください」とのことでした。

石井先生はそのころ京大から上智大学に移っておられ、その後、一九九七年から神田外語大学の第三代の学長として大学の発展におおきな功績を残されることになりますが、私も新聞記者を辞めてからここの教員に迎えていただきました。自分の研究室に行くと、となりの研究室に「エイチャン」という名前がでっており、びっくりしました。エイチャンさんは七年間の投獄のあと釈放され、難民としてアメリカに渡り、大学で研究、教育生活を送っていました。石井学長が神田に呼んだのです。私はあらためて、人生における人と人との出会いの不思議さを感じました。そして本日、スーチャーさんやエイチャン先生たちの民主化運動について彼といつしよに話をする機会にめぐまれることになったしです。

## 『ビルマからの手紙』

さて、前置きはこのくらいにしておきます。私はスーチャーさんにはじめて取材したとき、ほかのジャーナリストとおなじような質問をしましたが、もうひとつ、彼女に聞きたいこ

とがありました。それは、日本の読者のためにビルマの民主化運動について連載エッセイを書いてもらえないかという依頼です。

軍市政権による過酷な弾圧にくじけることなく、あくまで非暴力的な手段によって民主化を実現しようとするビルマの人びとの闘いに私は敬意と共感をいだいていました。私だけでなく、自由と平和を愛する世界中の人びとがおなじおもしろいことでした。彼女が自宅軟禁中の一九九一年にノーベル平和賞を受賞したのはそのあらわれです。ただ、私は東南アジアの仏教国における民主化運動についてもっと深く知りたいたいと思っていました。たしかに、民主主義と人権の尊重はグローバルな普遍的価値観ですが、同時にそれは世界各地のローカルな文化たちで展開されるものです。そこで、ビルマの民主化運動についても、それを抽象名詞としてではなく、この国独自の政治、歴史、文化、人びとの暮らしや価値観のなかで理解したい、というのが私の願いでした。

もちろん、すぐれた政治運動の指導者だからといってすばらしい文章が書けるとはかぎりませんが、私の知る彼女は学識、識見、人格、文才の点でも申し分のない人物でした。それに、原文が英語なので、毎日新聞に日本語訳が掲載されるとともに、英文毎日をつうじて世界中の人びとにビルマの民主化運動のうごきとその背景などを知ってもらうことができ

るはずです。私の依頼を、彼女は笑顔で快諾してくれました。一九九五年の十一月から『ビルマからの手紙』と題する連載が、週一回、毎日新聞に掲載されはじめました。

そこには、ビルマの人びとが軍人による強権政治をなくそうとしてどのような闘いをつづけているのか、なぜ人びとはあふれる恐怖のなかでも笑顔をたやさずに暮らしているのか、熱帯の国の折々の季節の変化や伝統的行事、歴史、人びとの日々の食べ物、ものの考え方などを織り交ぜながら、美しい文章でつづられています。多忙な政治活動のなかで、幅広い教養としなやかな感性に裏打ちされたこまやかな人間と自然の観察、ユーモアとウィットをけつして失わない文章は、日本の読者におおきな感動をあたえました。期待どおり、『手紙』の一部は世界のメディアにも紹介されるようになりました。本日の会場に置いてあるのは、この連載をまとめて出版したもので、民主化運動だけではなくビルマという国を理解するための最良のテキストとしての価値をいまでも失っていません。ぜひご一読いただければさいわいです。原文はイギリスのペンギン・ブックスの一冊になっているので、英語の勉強にもなります。

そこで、本日のテーマである「ミャンマー民主化のゆくえ」について、この連載の文章をてがかりに考えてみたいと思います。



『新ビルマからの手紙』  
(毎日新聞社、2012年)



永井浩先生



開会の辞を述べる酒井邦弥所長

## 民主化運動と仏教

ビルマでは、一九六二年にネウイン将軍がクーデターで政権を奪取して以来、独裁政権がつづいていましたが、経済発展に失敗し、一九八〇年代末には国連から「最貧国」に指定されます。圧政と貧困に苦しむ人びとの先頭に立つて反政府運動に立ち上がったのは学生たちです。一九八八年のことで、運動はすべての階層の国民を巻き込む民主化要求運動へと発展し、ネウインは政権の座から退かざるをえなくなり、ます。この運動のなかで、民主化の指導者として彗星のように登場したのがアウンサンスーチーです。彼女は、英国の植民地からのビルマ独立をめざす運動の指導者だったアウンサン人の長女ですが、当時はイギリス人学者と結婚して、英国で二人の子どもを育てていました。たまたま、病気の母の看病のために帰国していて民主化運動に遭遇し、そのまま運動に身を投じます。民主化はついに手の届きそうなところまで近づきますが、九月に軍がクーデターで実権を握り、民主化運動を徹底的に弾圧しはじめます。民主化勢力の中核政党「国民民主連盟」(NLD)の書記長だった彼女も自宅軟禁に置かれます。

軍事政権と民主化勢力の基本的な対立点は、経済開発をいかに進めるかをめぐってです。軍政は、ビルマのような後発国では経済発展が最優先課題であり、それを実現していくた

めには強力なリーダーシップが必要だと主張します。開発独裁の考え方です。東南アジアのほかの国々もそのようにして経済発展に成功しており、ビルマの場合は軍が上から国民を引っ張っていくべきだ。民主主義・人権を尊重しないわけではないが、それはもともと欧米の価値観であり、経済が発展し国民がたらふく飯を食べるようになってからでいい。にもかかわらず、民主化・人権を叫ぶアウンサンスーチーたちはビルマの破壊をねらう欧米の手先であると非難します。これに対して、民主化勢力は、国民の開発過程への参加、つまり民主化なしには健全で持続的な経済発展はのぞめないと反論します。また、民主主義・人権は普遍的な価値観であり、ビルマ国民の九割が信仰する仏教の教えのなかにも説かれている、したがってけつして欧米の独占的な価値観ではない、と主張します。

アウンサンスーチーが自宅軟禁を解かれたあと最初に首都を離れてむかった先は、東部にある寺院ターマニャです。ビルマ全土の人びとから尊敬されている、その高僧に会い、教えを乞うためです。『手紙』で、その旅行記を彼女はこう結んでいます。「政治的文脈のなかで、慈愛(ミッター)や誠実(ティッサー)などについて語ることが果たして妥当かどうか疑問視する人もいる。しかし、政治とは人間にかかわることであって、私たちがターマニャで見てきたものは、愛

と誠実がいかなる形の強制よりも人びとの心を強く動かすことができるということを証明した」。これが、彼女の政治哲学の基本姿勢であり、この仏教の教えは民主主義・人権とかわりないはずだとされる。

おなじことは、非暴力に徹した民主化の実現についてもいえます。この点については彼女の場合、インドの独立運動指導者マハトマ・ガンジーの不服従思想から影響をうけているといわれますが、非暴力・不殺生（アヒンサー）は仏教の基本的な教えです。だが、軍政指導者は政府を批判する人びとを暴力によって弾圧しています。また仏教ではすべての人の平等が説かれているのに、軍政下で貧富の格差が進み、軍人を中心とするひと握りの特権層が富と権力を独占しようとしている。だとすれば、民主主義・人権の尊重はけっして欧米の受け売りではないし、軍事政権こそビルマの伝統的な価値観から外れた政治をおこなっているのではないか。問われているのは、軍政と民主化勢力のどちらが仏教倫理に合致した政治をめざそうとしているのかであり、仏法（dharma）が政治的正当性の根拠とされている。

では、どうすればよいのか。変革の武器となるのが「諸行無常」の世界観です。このことばから私たち日本人が思い浮かべるのは、鴨長明の『方丈記』の冒頭ではないでしょうか。「ゆく川の流れば絶えずして、しかももとの水にあらず。流

れに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結び……」。世の中のうつろいやすく、はかなさをさしているにみえますが、アウンサンスーチーたちは諸行無常をもつと積極的な意味でとらえています。これは、万物が一瞬たりともおなじ形ではなく、相互依存の関係性のなかで生起・変転しつづけているという見方です。かつての大英帝国の植民地支配がそうであったように、現在の軍事政権も未来永劫つづくものではない。ただし、その変化は自然におとずれるのではなく、私たち一人ひとりが今の一瞬一瞬をたいせつにして新しい未来をつつていくために精一杯努力しなければなりません。

仏教というと、私たち日本人の日常生活とはあまり縁がなく、むずかしいことを説いているように思えるかもしれません。しかし、西洋ではキリスト教が、中東やインドネシアではイスラム教が人びとの生まれたときから日常生活に浸透しているように、ビルマの人びとのほとんどにとっては仏教が生活のすみずみに根づいています。ですから、仏教の教えにもとづいて政治を語ることは日々の暮らしと地続きの関係にあり、人びとは軍政と民主化勢力のどちらの主張がたしかに容易に判断できるのです。私がアウンサンスーチーたちのたたかいにあらためて感動したのは、自分たちの足元の言葉で民主化・人権を語り、それが圧倒的な国民の支持を受けると同時に、世界の人びとも幅広い支援の輪を獲得して

いったことです。仏教じたいはインドでうまれた地域宗教で、それがキリスト教、イスラム教とならぶ世界宗教へと発展していくわけですが、ビルマにおいてはひとつのローカルななちで展開されていきました。そのローカルな運動が民主主義・人権をもとめるグローバルな声とむすびついて、世界全体の平和と正義をさらに前進させていくことに貢献する。ひるがえって、私たち日本人が国家、民族、宗教などの違いを超えて世界の人びとのところを打つことのできるメッセージとは何なのかも考えさせられます。

### 「自由で平和な世界」をめざして

ビルマでは現在、二〇一一年三月の「民政移管」によって誕生したテインセイン政権のもとでやつと民主化への一歩が踏み出されました。テインセイン大統領はアウンサンスーチーを三度目の自宅軟禁から解放し、二〇一二年四月の国会補欠選挙ではNLDが圧勝し、彼女も当選しました。国外に自由に渡航できるようになった彼女が、受賞から二十一年たつてやつとノーベル平和賞の受賞記念講演を六月にノルウェーでおこなったことは、そうした前進の大きな節目を意味しています。ビルマ国民も国際社会も、民主化の進展を歓迎し、アメリカのクリントン國務長官（当時）はじめ欧米諸国の政府高官らが相つぎビルマを訪問し、関係改善について

大統領やスーチーらとの会談を開始しました。欧米は、軍事政権に対しておこなっていた経済制裁を緩和しようとしています。日本政府はODA（政府開発援助）の再開を表明し、玄葉外相（当時）はテインセイン大統領らとの会談で日本企業の投資促進について協議しました。したがって、ビルマ経済の再建も軌道に乗っていくことが期待されています。

しかし、民主化の前途はけつして平坦ではなく、そして何よりも大切なのは、民主化が本格的な軌道に乗りだしたとしても、それが経済発展にむすびつき、その成果が国民に公平に分配される「よき統治」システムが確立されるかどうかの問題です。日本の政府と経済界は新政権の「民主化」に便乗して目先の経済利益だけを追求することなく、ビルマ国民全体のしあわせを視野に入れた改革の後押しにとめるべきでしょう。アウンサンスーチーの「手紙」にこのような一節があります。「自分たちの懐を豊かにしたいと思つてビルマにやつてくるビジネスマンたちを観察していると、果樹園のなかであえかな美しさにひかれて蕾を乱暴にむしり取つてしまひ、略奪された枝の醜さには目が行かず、その行為によつて将来の実り多い収穫を危うくし、樹木の正当な持ち主に対して不正を働いているという事実には気づかない通りすがりの人を見ているようなところがある」。

経済発展のパートナーにも、慈愛と誠実の精神が求められ



るということだと思えます。それが、アウンサンスーチーがノーベル平和賞の受賞講演で述べた、「自由で平和な世界」の建設にもつながっていくはずです。

\*軍事政権は一九八九年、国名の英語表記をBurma（ビルマ）から Myanmar（ミャンマー）に変更した。これに対して、アウンサンスーチーら民主化勢力は、軍政は一九九〇年の総選挙におけるNLDの圧勝を認めない非合法政権であり、国名変更を認めることは軍政の合法性を追認することを意味するとして、ビルマを使っている。欧米の政府、メディアも旧名を使っているところが多い。

### 参考資料

- ・アウンサンスーチー『ビルマからの手紙 増補復刻版』（土佐桂子・永井浩訳、二〇一二年、毎日新聞社）
- ・アウンサンスーチー『新ビルマからの手紙』（土佐桂子・永井浩・毎日新聞外信部訳、二〇一二年、毎日新聞社）
- ・アウンサンスーチー「ノーベル平和賞受賞演説」  
[http://www.nobelprize.org/nobel\\_prizes/peace/laureates/1991/kyi-lecture\\_en.html](http://www.nobelprize.org/nobel_prizes/peace/laureates/1991/kyi-lecture_en.html)

### コメント（エイチャン、執筆Ⅱ今千春）

続いてエイチャン氏からは、アウンサンスーチー氏との交友や彼女の人柄について語られた。エイチャン氏とアウンサンスーチー氏とは京都大学の留学生として出会い、級友として親交を深めていったという。当時アウンサンスーチー氏はイギリスの大学に在学中で、資料収集のため東南アジア研究センターの연구원として来日していた。エイチャン氏によって語られるアウンサンスーチー氏は、現在のアウンサンスーチー氏とは違った印象で、彼女の本来の人間性、そして指導者として変化していった様子が読み取れた。



コメンテーターのエイチャン先生



聴き入る参加者



会場からは多くの質問が飛び交った